

1. 巻頭言

— インフォメーションとインテリジェンス —

学長 横山 哲夫



総合情報処理センターの順調な発展を、心よりおよろこびいたします。総合情報処理センターの前身は昭和45年に工学部におかれた全学共同利用の「電子計算機室」であります。その後昭和54年に学内措置の「情報処理センター」へ発展し、昭和63年には省令施設として現在の「総合情報処理センター」へ昇格しました。その間、施設・設備は拡充を続け、本学の誇りうる施設の一つとなっています。本年1月には、新しいシステムへの転換が終わって稼働を始め、一層の充実を遂げました。また、学内ネットワークの構築も進み、研究・教育にとって大きな助けとなることが期待されます。これまでセンターの運営や発展に力を注がれた関係各位に、深い感謝の念と敬意を表します。

現代のハイテク社会は、情報・エネルギー・材料が三本柱とよく言われますが、その一翼をになう総合情報処理センターへの期待は、今後ますます高まるものと思います。情報処理の威力は今や各方面において遺憾なく発揮され、高度な総合技術から日常生活にいたるまで、情報処理システムがない状態は、もう考えられなくなっています。情報処理の迅速化・集中化の恩恵を、我々は享受しています。研究においては尚のことで、必要不可欠のシステムであります。

さて、情報というとき、2種類があります。一つはインフォメーションであり、もう一つはインテリジェンスですが、両者は一線を画しています。インフォメーションの方は、新聞やニュース、本、統計資料など、発表されている、努力すれば手に入り分析できるものです。インテリジェンスの方は、ふつうではどこをどう探しても手に入らない、それを持っている人から入手する以外に手に入らない情報です。スパイ小説にカウンターインテリジェンス(対敵諜報活動(機関))や、カウンターエスピオナージ(対情報活動)などの言葉がでてきますが、そのような意味の情報です。

情報処理という場合、処理自体の高速化・効率化が目的ですが、処理される情報の量に加えて、質がもっとも重要です。そしてさらに、インテリジェンスに相当する情報は、データベースにももともと入っていません。そういうインテリジェンスを生み出すのは往々にして研究者個人であり、個人レベルの計算作業などにももちろん情報処理システムは大きな威力を発揮します。我々は情報処理によってインフォメーションを効率よく利用しながら、インテリジェンスを創造的に生産すべきでしょう。

このようなことは、研究をしている人なら誰でも思うことでしょうし、私が書く必要はなかったかもしれません。

「釈迦に説法、孔子に悟道」のたとえもあり、妄言多謝。

終わりにあたり、総合情報処理センターの一層の発展を祈ります。